
「第16回・17回特発性心室細動研究会」特集号発行にあたって

特発性心室細動研究会 (J-IVFS) 代表幹事
筑波大学医学医療系循環器内科教授
青沼和隆

特発性心室細動研究会 (J-IVFS) は特発性心室細動の前向き観察研究として 19年の歴史を有しており、日本のみならず世界でも類を見ない、長期観察研究と言っても過言ではありません。

本研究会では毎年 1 回研究会を開催し、研究成果発表および情報交換などを行っております。現在 (2019年 12月時点) も全国 70施設にご協力いただき、750症例が登録されており、Brugada 症候群を含む特発性心室細動の病態解明に向けて日々研究を重ねております。

例年通り、2018年には第 16回、2019年には第 17回の研究会が開催され、第 16回の演題は「非 Brugada 型特発性心室細動に対するリスク評価と治療：非侵襲的アプローチについて」、非 Brugada 型特発性心室細動に対するリスク評価と治療：侵襲的アプローチについて」、第 17回の演題は「器質的心疾患を伴わない難治性心室頻拍に対するカテーテルアブレーション治療について (QT 延長症候群、ベラパミル感受性心室頻拍、カテコラミン感受性心室頻拍、Purkinje 起源心室頻拍などを含む)」、「診断や治療に難渋した、あるいは興味深い特発性心室細動症例 (Brugada 症候群を含む) について」とし、多くの貴重な研究発表がなされ、熱いディスカッションが交わされました。海外からは、第 16回では Dr. Josep Brugada、第 17回では Dr. Michel Haïssaguerre を招聘し、非常に有意義な講演を賜りました。各回ともに 100名を超える方々にご参加いただき、大盛況を博しました。

本研究会は日本のみならず世界中で注目を集めており、国内では本研究会の前向き長期観察研究のエビデンスが日本循環器学会の『遺伝性不整脈の診療に関するガイドライン』に大きく反映され、国外では本研究会の演題をヒントにしたと思われる多くの論文が一流誌に掲載されています。今後も、本研究会における研究発表およびディスカッションが新たな研究の一助となることを祈念して、ここに第 16回・17回特発性心室細動研究会の演題を記録集としてまとめ、発行させていただきます。

末筆となりましたが、幹事の先生方をはじめ、ご支援いただいている皆様に厚く御礼申し上げますとともに、引き続き調査研究のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2020年 1月吉日